

2024/5/5

ルカの福音書 講解メッセージ④

『ルカの福音書2章1-29節 イエスの誕生』

※ 神の靈感によって書かれた聖書

「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリヤの総督であったときの最初の住民登録であった。それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になつているいいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。」

(ルカ 2:1-5)

この福音書の著者ルカは医者であり、当時の内容が非常に正確に描写されています。聖書がすごいと言われるのは、神話ではなく事実が書き記されている点です。アウグストもクレニオも実在の人物であり、ここに書かれている内容は、書かれた時代の人にとって納得できる内容であったからこそ、淘汰されることなく受け入れられていました。

「ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝させた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」(ルカ 2:6-7)

マリヤは処女でしたが、マリヤが産んだイエスは神であり、聖靈によってみごもつた子どもです。

「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。」(ルカ 1:26-27)

処女から男の子が生まれるというのは、次の旧約聖書の預言の成就です。

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」（イザヤ 7:14）

「処女」はヘブル語の「アルマー」で、乙女あるいは若い女性を指す言葉です。これがギリシャ語の「パルテノス（処女）」に訳されたのです。

「聖書は神の靈感によって書かれた」（II テモテ 3:16）とありますが、この「聖書」とは、当時の70人訳聖書を指しています。ヘブライ語は単語数の少ない言語なので、どちらかというと概念を表す言語です。ですから、ギリシャ語で理解したり訳したりするためには、神の靈感によらなければできないことだったのです。ユダヤ教徒はこの訳に反発し、「パルテノス」とは訳していません。しかし、実際にイエス・キリストは、処女から誕生しました。まさに神の靈感によって訳されたものであったということが言えます。

※ この方こそ主キリストです

「さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。御使いは彼らに言った。「恐れることはあります。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」

（ルカ 2:8-12）

御使いが知らせた良い知らせ「この方こそ主キリストです」とは、どういう意味なのでしょうか。

主とは、当時彼らが使っていた神を指す言葉です。つまり、生まれる男の子は、彼らが礼拝してきた神であるということです。神は御自分の名を教えてくれましたが、その名をむやみに唱えるなと命じられました。その頭文字をとって YHWH と書き表しますが、読み方はわかりません。そこで、代わりに「アドナイ（主）」という呼び方

が使われたのです。

「すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」（ピリピ 2:11）

「キリスト」とは、ヘブライ語の「メシヤ」の訳です。「油注がれた者」という意味で、油を注がれた者とは「預言者・祭司・王」のことであり、「メシヤ」は、預言者であり祭司であり王である方、すなわち救い主を指す言葉だったのです。つまり、「この方こそ主キリストです」とは、生まれてくる男の子は、人々が待ち望む救い主であると言われたのです。マリヤは、「わが靈は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」（ルカ 1:47）と賛美しました。イエス・キリストは、人間の姿をもって来られましたが、あくまでも神です。

「すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」（ルカ 2:13-14）

神の平和は、単に争いがないという意味ではなく、神と一つになることです。その結果、争いがなくなるのです。私たちは生まれながらにして神との間に壁があります。イエス・キリストは、その壁を壊し、私たちと一つになるために来られたのです。神との間に平和が築かれれば、人との間にも平和が築かれます。神は愛だからです。「御心にかなう」とは、律法を行うことではなく、神のことばを信じることです。神との関係を築き上げるのは、信仰によるのです。

「すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言わされた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」（ヨハネ 6:28-29）

神のことばを信じることが神のわざです。神が私たちに告知し招待している神のことばは、聖書です。その聖書に応答し、「信じる」と告白すること、これが御心にかなった生き方です。

※ 求めて生きる

「御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来を見て来よう。」そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを探し当てた。」（ルカ 2:15-16）

羊飼いたちは、御使いの言葉を信じて、マリヤとヨセフを探し当てました。御使いのことばを聞いて彼らがしたことは、「信じて求める」ということです。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（ルカ 11:9）とイエス様は言われましたが、あなたは神のことばを信じて求めているでしょうか。神のことばを信じて求めるなら、この羊飼いたちのように、必ず探し当てることができます。

「それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したこと驚いた。しかしマリヤは、これらのことすべて心に納めて、思いを巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」（ルカ 2:17-20）

このように、神が言われたことは必ず成就します。

※ 割礼とは

「八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。」（ルカ 2:21）

「イエス」は、この地上での名前です。「イエス・キリスト」とは、このイエスが約束の救い主であるというこの地上での呼び名です。

「さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。——それは、主の律法に「母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばれなければならない」と書いてあるとおりであった——また、主の律法に「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定められたところに従って犠牲をささげるためであった。」（ルカ 2:22-24）

割礼とは、アブラハムが神から永遠の契約を受け取ったという印です。現代でいう契約書へのサインのようなもので、人が、神との永遠の契約の中で生きていくという印なのです。

「次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい。あなたがたは、あなたがたの包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたの間の契約のしるしである。あなたがたの中の男子はみな、代々にわたり、生まれて八日目に、割礼を受けなければならない。家で生まれたしもべも、外国人から金で買い取られたあなたの子孫ではない者も。」（創世記 17:10-12）

神がアブラハムに与えた永遠の契約の内容は次のとおりです。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」ついで、神はアブラハムに仰せられた。「あなたは、あなたの後のあなたの子孫とともに、代々にわたり、わたしの契約を守らなければならない。」（創世記 17:7-9）

「わたしがあなたとあなたの子孫の神となる」とは、神が人を救うということです。また、「カナンの全土を所有する」とは、安息を与えるという意味です。これが永遠の契約です。

この御言葉によって、今もイスラエル周辺の国々は領土の所有を主張して争いを続

けていますが、神が与えてくださったものは永遠の安息、すなわち平安です。要するに、永遠の契約とは、神が人を救って、永遠の安息を与えるという約束です。その印として割礼を行うように命じられているのです。

では、今日の私たちには、この約束の印である割礼を守る必要はないのでしょうか。

「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上の中の割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御靈による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」（ローマ 2:28-29）

今日、私たちは、外見上の割礼ではなく、心の割礼を受けることが重要だと聖書は教えます。心の割礼とは、神のことばに応答する信仰です。神の呼びかけに応答したなら、私たちは割礼を受けたのと同じだということです。なぜなら、神の呼びかけは永遠の契約に基づいてなされる呼びかけだからです。神の呼びかけである福音を私たちが受け取ったという印、それがイエス・キリストを信じる信仰です。

イエス・キリストが平和の福音をもってこの地上に来られた以上、イエス・キリストを受け入れることが、契約の印である心の割礼を受け取ったことになるのです。

「主が罪を認めない人は幸いである。それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた」と言っていますが、どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときにでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。」

（ローマ 4:8-12）

アブラハムは信仰によって義と認められ、その印として割礼が与えられたと書いてあります。当時は、イエス・キリストが現れる以前だったので割礼という印が与えら

れましたが、イエス様が来られた今は、信仰による救いが明らかにされたので、割礼は必要ありません。

割礼を主張する人たちは、律法を行うことによって救いを得ようとしています。しかし、パウロも、イエス様ご自身も、行いではなく信仰によって救われるのだと語り、彼らと徹底的に戦いました。

「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行う義務があります。律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。私たちは、信仰により、御靈によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことではなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。」（ガラテヤ 5:2-6）

大事なのは、愛によって働く信仰だけです。愛とは、一つになろうとする運動です。つまり、神と和解し、神と一つになろうとする信仰こそが大切なのです。それは決してご利益を求めた信仰ではありません。

神と一つになるということは、人とも一つになるということです。愛を土台としてイエス・キリストを信じることが重要なのです。人をさばかず、自分の利益を求めるのではなく、一つになることを目指す信仰です。私たちの目標は平和です。割礼を受けるとか受けないとかの論争は、本来の意味から完全にそれたものです。自分のことばかりを見て愛から目をそらすのではなく、愛を土台とした信仰を築くこと目を向けて生きていきましょう。